

『高慢と偏見』における女性教育

末 森 恵 子

幸福な結婚に向けてヒロインの倫理的側面の成長を描くのは、女性向けの教養小説にとって一つの普遍的な枠組みであった。読者は女性の幸福イコール家庭だとする概念を受け入れ、その幸福を享受するための「模範的な」生き方をそこから学ぶことになる。だがそれは同時に「ふさわしい」道から外れることの危険性をも説いている。例えばサミュエル・リチャードソンの『パミラ』には、道徳的なヒロインであるパミラが幸福を手に入れる図ばかりでなく、対照的な「墮落した女」の悲惨な末路もまた描かれているのである。¹

そのような痛い目にあう女性というのは、「ふさわしい」生き方を守らない危険を具体化するという役割を担っている。その役割がライバルの女性に当てはめられる場合もあるだろうし、ヒロイン自身の場合もあるだろう。時としてその運命は「ふさわしい」生き方そのものよりも強烈な印象を残すため、女性が改心する姿を効果的に示すことは、高い「教育」の効果をもたらすことになる。このようにして、「ふさわしい」生き方をしなければ幸せな結婚はできず、幸せな結婚ができなければ不幸な人生になる、という脅迫的観念でもって女性を教育しようとするやり方が、教養小説の中には構築されるのである。

それではどのようなものが「ふさわしい」生き方だとされていたのか。ジャン・ジャック・ルソーが、『エミール』の中で「女性の教育はすべて男性に関連

1 以下は『パミラ』の結末に示された、「悔い改めない女」に対する警告ととれる部分である。

While the prostitute, pursuing the wicked courses into which, perhaps, she was at first inadvertently drawn, hurries herself into filthy diseases and an untimely death; and, too probably, into everlasting perdition. (*Pamela* 281)

して考えられねばならない」という言葉で、それを明示している。

A woman's education must therefore be planned in relation to man. To be pleasing in his sight, to win his respect and love, to train him in childhood, to tend him in manhood, to counsel and console, to make his life pleasant and happy, these are the duties of woman for all time, and this is what she should be taught while she is young. (*Emile* 328)

ルソーは女性の生涯にわたる義務を説き、そのための「たしなみ (accomplishments)」を教え込むことこそが教育だとしている。いうまでもなくこの書はイギリスにおいても多大な影響を及ぼした、十八世紀後半からの女性教育の規範を考えるうえで欠かせないものである。ほかの教育書、コンダクトブック、そして小説など様々な媒体が、これと同様の「教育」を提唱している。

『エミール』では、男性のあらゆる望みにかなうために、性格については「従順で辛抱強く」、身体については「か弱く美しく」あることで、女性は従属する性としての特質を表現することが求められる。このような教育観にとって結婚は、男性との結びつきが確実なものになったことを証明する完全な形態なのであり、それゆえ女性にふさわしい人生のゴールとして設定されるのも当然のことになるだろう。そのゴールに向けて絶えずヒロインたちは形成され、その「美德」ゆえに安全で幸福な生涯を送る姿を、読者に印象付けたのである。このように教育的意図をもった書では、ふさわしい女性／ふさわしくない女性には、そのキャラクターと運命において明確に線引きがなされている。

結婚のために作られた「ふさわしい女性」のための教育が、心身両面の健康と発達からはほど遠いものであることを考えると、『高慢と偏見』のエリザベス・ベネットのようなヒロインは、それとは異なった系譜から発生しているといえる。十八世紀後半は、それまでの「女子教育の現状に対する批判が吹き出し、百花繚乱の女性教育論が展開される」(イングランド女子教育史研究 99) ようになった時代でもあったのである。その教育論の中には、前述の弱々しい女性とは違った、明確な理性をもった女性が理想として掲げられるものもあっ

た。例えばその中の一つ、メアリ・ウルストンクラフトが描いた女性像は、エリザベスに非常に近いものとして挙げられる。²

エリザベスの性格は、いわゆる「女性らしい」とされてきたものよりは、「快活」「知的」「行動的」という面が強調されている。これらはどれも庇護を必要としないという意味では、「男性的な性質」だと考えられるものだったのであろう。その意志の強さと健康な身体は、一人ではるばる病気の姉を訪ねに行くというような（第七章）、周囲にとっては予想外の行動をも可能にする。その行動は彼らにとっては未知のものだったのであろう、「女性の自立」の象徴的な一端である。そこでは女性の中に絶対的に必要だとされていたはずの男性の存在意義は危うくなりかねず、全てが男性に結び付けて考えられてきた女性教育によってこの支えが失われることは、思想の根幹を揺るがす脅威となるのである。

ウルストンクラフトがその波乱に満ちた生涯が原因で激しい非難を浴びた時期には、彼女の思想を模倣したがために不幸になるヒロインを描いた小説がいくつも見られたという。³ これもまた「ふさわしい」生き方を外れた女性に対してそのことの危険を極端に描くことで、読者に脅迫的に警告を行った例であろう。エリザベスはウルストンクラフトの思想を模倣したヒロインだとはいわないまでも、少なくとも当時のヒロインの定義からはかなり自由な女性である。だが彼女はそれまでの定義どおりに不幸になるどころか、周りの女性たちよりもはるかに幸福と見なされる結婚をしてみせる。その革新性にもかかわらずエリザベスが肯定され、教訓をかたくなに守ってきた女性と同様に幸福を得る

2 ウルストンクラフトは「理想的な女性」について、次のように言及している。

a woman with a tolerable understanding . . . whose constitution, strengthened by exercise, has allowed her body to acquire its full vigour; her mind, at the same time, gradually expanding itself to comprehend the moral duties of life, and in what human virtue and dignity consist. (*A Vindication of the Rights of Woman* 50)

3 白井堯子によれば、例えばRobert Bissetの*Douglas* (1800) や、Charles Lucasの*The Infernal Quixote* (1801) において、『女性の権利の擁護』を読んで墮落してしまった若い女性の惨めな姿が描かれたということである。(白井、『女性の権利の擁護』の訳者解説参照。)

——女性の「ふさわしい」生き方を説いてきた物語に対して、この図を描くことは挑戦のようなものとなろう。つまり彼女の革新性は、ふさわしい女性（幸福・結婚）／ふさわしくない女性（不幸・破滅）の境界を揺るがしたことにある。「結婚」という同じゴールに向けて進みながらも、女性を脅すようにして既定の型にはめようとするのではなく、それをかわして固定化されたヒロイン像と教育観から女性を解放することから、オースティンの新しいヒロインと物語は生まれているのである。

この見方によれば『高慢と偏見』は、「ふさわしい女性」の道をまっすぐ歩むことを拒んだ一人の女性が、既存の教育思想に基づく偏見の中で、自己を完成させていく様子を描いた作品となる。そしてここに見られる女性教育は、それまでの男性に関わるものとして作り上げられた「教育」を否定したうえで成立するのである。だがこのような解釈が可能であるにもかかわらず、その反抗的側面があらわになっていないことは、クロウディア・L・ジョンソンが指摘するように「オースティンは保守的な時代の波の中で、間接的な多様な手段を用いて社会批判を紛れ込ませた」(Johnson 24) ということの証拠なのかもしれない。『高慢と偏見』においては、結婚のプロットに覆われた見事な構成がその手段の一つなのではないかと思われる。だとすれば、それを読み取るには男性との関わりを象徴する「結婚」の枠組みの内部に作られた、女性中心の世界を検討することが必要である。エリザベスがその中で一ヒロインとして、女性にとっての「ふさわしい姿」を強要する「偏見」にどのように対処しているのかに焦点をおいて、『高慢と偏見』を論じていきたいと思う。

この物語においてどういうものが「ふさわしい女性」であるかという問題は、様々な女性たちを描くことで検討される。川本静子が、オースティンの「ティー・テーブルのまわりにくりひろげられる世界は・・・いわばミクロの社会とも言うべきである」(13)と表現するように、この作品にもやはり様々な女性のタイプを代表するキャラクターが出てくる。彼女らは、それまでの小説のヒロイン像と離れているはずのエリザベスがヒロインに配されたことで、相対的にその位置をずらされた女性たちだといえる。

偏った女性教育が作り上げた最も分かりやすい例は、"mean understanding, little information, and uncertain temper" (3) をもつエリザベスの母親、ベネット夫人であろう。彼女は美しさと愚かさを共に女性の魅力として信じ込み、結婚に全幸福をかける女性を風刺した人物として提示されている。作中でのベネット夫人の仕事は主に、結婚と結びつく場面においての娘への干渉であり、例えばエリザベスがコリンズに求婚されたときには、断ろうとするエリザベスを「一生結婚ができないこと、養ってもらえないことの恐怖」を掲げて必死に思いとどませようとしたりする。それは教養小説が女性の不幸な運命の例を描いて「ふさわしい」道から外れないように警告するのと、同じ働きをしている。

だが、自分の価値基準を絶対的に正しいと信じこんでいるベネット夫人自身の結婚生活は、どのようなものだったのか。小説では簡潔に言及されている。

Her father captivated by youth and beauty, and that appearance of good humour, which youth and beauty generally give, had married a woman whose weak understanding and illiberal mind, had very early in their marriage put an end to all real affection for her. Respect, esteem, and confidence, had vanished for ever; and all his views of domestic happiness were overthrown. (162)

ベネット夫人が価値を置く「若さと美しさがもたらす愛嬌」は、確かに「結婚」の夢を叶えたけれども、それは「理解力の弱さと狭量な心」によってすぐに蝕まれてしまう運命の、はかないものであった。理想的な夫婦の関係については、ルソーが「理性的で経験にも勝る夫が妻を教育する」関係を提唱したのに対し、ハナ・モアはさらに「妻が優れた精神性で夫の慰めとなる」関係を示した。だがベネット夫妻の間にはそのどちらも成立していない。夫人自身がこの現実気づいておらず、改善もされないまま、夫婦の食い違いはより大きくなっている。ベネット夫人の存在は、娘のエリザベスに正しい結婚についての教訓を与えるためのものではないのである。

それどころか、夫婦の不釣り合いは娘たちに明らかに不利益をもたらしている。

夫婦の関係はそのまま、娘たちに対する父親の無関心と、母親の誤った価値観の押し付けとなって表れる。ベネット氏は娘たちの中でも自分と似た性質を持つエリザベスを特にかわいがり、妻と似た者には（妻自身に対してと同様）嘲笑を浴びせるのみである。その結果、エリザベスが "[her father's] talents which rightly used, might at least have preserved the respectability of his daughters, even if incapable of enlarging the mind of his wife." (163) と考えているように、品位を保てなくなるまでに娘たちは放っておかれてしまっている。ベネット家では、教育者としての親は十分に機能していないといえるだろう。

ベネット夫人を形成した、結婚を目標として女性をふさわしく作り上げる教育は、ここでは全く価値を持たないのである。女性に教育された「たしなみ」が、夫を獲得するという目標が達成された後にはすっかり意義を失ってしまっているのだから。さらにはわが娘の結婚以外に楽しみを見出せない母親が、娘に同じような人生への橋渡しをすることにより、その運命を連鎖させていくというつながりさえも見られる。そうして夫人から、末娘のリディアにその軽薄さが確実に受け継がれていっている。このような結婚のプロットが突きつけるものは、ヒロインが「ふさわしい」女性の概念を受け入れないことの危険ではなく、反対に盲目的に受け入れることの危険であるといえよう。そしてそこから逃れることにこそ、エリザベスの幸福への足がかりが存在するのである。エリザベスが母の命じるコリンズとの結婚を拒むことは、自ら新たな機会をつかんで得るダーシーとの結婚という、好対照をなす事件をもつ結婚プロットに向けての第一歩となるのである。

それまでの偏った女性観を受け入れないエリザベスには、当然ベネット夫人からは、 "she is not half so handsome as Jane, nor half so good humoured as Lydia" (2) などと、器量と愛嬌の観点から劣っている女性だとの評価だけがなされる。より厳しくエリザベスの品定めをするビングリー姉妹からは、さらに上流階級の教育観を窺うことができる。 "Her manners were pronounced to be very bad indeed, a mixture of pride and impertinence; she had no conversation, no stile, no taste, no beauty." (23) "She has nothing, in short, to recommend her"

(23)などとエリザベスを趣味の悪いつまらない人物だと酷評する彼女らにとって、何が一番問題なのかを考えると、それはエリザベスが「淑女のふるまいの規範」から外れていることなのだと分かる。

一方ビングリー嬢の考える「ふさわしい女性」像は、次のように言い表されている。

A woman must have a thorough knowledge of music, singing, drawing, dancing, and the modern languages, to deserve the word; and besides all this, she must possess a certain something in her air and manner of walking, the tone of her voice, her address and expressions, of the word will be but half deserved. (26)

ここには音楽、踊り、歩き方など女性が身につけるべき「たしなみ」とされていたものが並んでいる。エリザベスはピアノの演奏がメアリの半分も上手でないと言われていたが(16)、確かに彼女はたしなみ事に特に秀でていているというわけではない。

しかしビングリー嬢の見解は、社会的に認められていたものであっても、作品中で肯定されてはいない。ベネット夫人にせよビングリー嬢にせよ、幸福になるにふさわしい女性像を提唱する女性たちは、オースティンのアイロニーによって、エリザベスを非難すればするほど自らの空虚さが暴かれることになる。そしてエリザベスが周囲の示す「ふさわしい女性」の道から外れることの危険に惑わされずにいられるのは、彼女らには欠けていて自分には備わっているものとしての、「理性」を絶対的な基準としているからである。次に扱うコリンズとの価値観の対決の際に、それが証明されよう。

ベネット氏やダーシーのようにエリザベスの長所を認めてくれる男性がいる一方で、伝統的な女性観をそのまま彼女に押し付ける役割を担うのが、コリンズである。ジェイムズ・フォーダイスの『若き女性たちへの説教』は、ウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』でも『エミール』などと並んで批判されていた、父権的価値観をあらわにする書物だったが、コリンズは実にこの書物

を携えて登場する。彼は "there can be nothing so advantageous to them [young ladies] as instruction" (48) との信念のもと、若き女性たちを導こうとする思い上がった教育者を風刺した人物だが、その「説教」が退屈なものとして本人ともどもからかいの対象であることは、リディアのあからさまに無関心に説教を遮る態度に表れるとおりである。

次にコリンズがその教育観をいかんなく披露する機会が訪れるのは、エリザベスへの求婚の時である。プロポーズを断るエリザベスの態度を、彼は女の「慎み」からくるものだと信じ込み、讃えてみせさえする。だが彼のいう「慎み」は、エリザベスにとっては何の価値も意味ももたないものだった。エリザベスは彼に対して自らを "an elegant female intending to plague you" (76) ではなく、"a rational creature speaking the truth from her heart" (76) というように、「理性的な存在」だと考えるよう要求している。周囲の期待とは異なる、エリザベス自らの「あるべき女性像」が浮き彫りになる瞬間である。

コリンズが担うもう一つの重要な役割は、「シャーロットの夫」になるということである。彼と結婚することによって、シャーロットの位置が大きく変化するからである。シャーロットは以前はジェーン同様、エリザベスの信頼できる相談相手であったのだが、コリンズと結婚することでその地位を一気に失う。が同時に彼女は、コリンズを通して哀れな独身女性というアンチ・ヒロインの道から、プロポーズされて結婚するという、まさに「ふさわしい」ヒロインの道へと参入するのである。この時点において、母に望まれたコリンズとの結婚の道をヒロインらしからぬ断固とした態度で拒み、(母がいうには)「一生夫をもてなくなる」かもしれない立場へと移行するエリザベスとは、正反対の変化を経験しているといえる。

コリンズを彼の教育観と共に受け入れ服従することに耐えられないエリザベスにとっては、彼と結婚したシャーロットの生き方は突如として、ベネット夫人やビングリー嬢らのように男性中心的な教育観を強要するグループのそれになったように見えたことだろう。"Elizabeth felt persuaded that no real confidence could ever subsist between them again" (90) とあるように、エリザベスは

同胞としてのシャーロットに大いに失望しているのである。しかしながらのちに、コリンズの愚かさに耐え、目の届かないところでその害が及ばないように気を配っているシャーロットを見たエリザベスには、彼女のような女性にとってはそれがほとんど唯一の、社会との折り合いをつける道であることが分かってくる。エリザベスは全面的に賛成はできないまでも、*"She seems perfectly happy, however, and in a prudential light, it is certainly a very good match for her."* (123) と、シャーロットなりの幸福の形を認めるに至っている。結婚によってコリンズの教育観を受け入れたかのように見えるシャーロットだが、それはあくまで形式的なことであって、ちょうど彼女が自分と友人たちのいる居間を夫から密かに隔離していたように、実際はそれから離れたところに身を置いていたのである。

シャーロットのこの方法は、実は物語の構造自体が採りうる策略——女性教育に関する革新的側面を、結婚という伝統的プロットによって覆うというもの——と結び付けられる。そしてここで念入りに覆われているものは、父権的教育を排除したうえに成立する、女性中心の世界なのである。その選ばれた位置に入ることができるのは、まず何をおいても姉のジェーンであろう。

ジェーンは、ベネット夫人やビングリー嬢の「女性らしさ」の要求を完璧に満たすことのできる女性である。そして汚れた心を信じない清らかさが強調される彼女は、ヴィクトリア時代のイデオロギー *"angel in the house"* を彷彿とさせる女性だといえる。「家庭の天使」像は父権制社会が作り出した概念であり、その意味ではエリザベスの「女性像」にとっては身近な脅威となるだろう。「慰める天使」のイメージは、「理性的な女性」にとっては「飾りものの女性」とはまた異なった偶像なのである。実際エリザベスはジェーンの純粹すぎる心を理解できずに、よくそれをからかってみせている。

ダーシーへの誤解に気づいたとき、エリザベスが同時に *"I... have often disdained the generous candour of my sister, and gratified my vanity, in useless of blameable distrust"* (143) と、姉に対する自らの不当な評価に気づくのは、彼女の成長を表すための確かな指標になる。さらにはエリザベスが「新しい女性」

としてそのような「天使」をしのいで魅力的なヒロインの座に着き、より条件のいい結婚をするという意味では、ジェーンはエリザベスを引き立たせる役割ももっているであろう。「天使」としてのジェーンは、エリザベスとの対照においてその価値を発揮している。

しかし、ジェーンは他の女性たちのように批判的な視点で描かれているわけではなく、最愛の男性とめでたく結婚するという物語の結末にも、彼女の美德が確実に報われているのを見ることができる。その違いからして、彼女は単なる「天使」の側面からだけでなく、エリザベスと同様、理性の点から注目することが必要だろう。ベネット夫人やビングリー嬢がジェーンを讃えるのは、その器量の良さやおとなしさというような彼女らの知る範囲での表面的な「女性らしさ」だが、エリザベスはジェーンのもつ分別や誠実な心をそれ以上に評価しているのである。愚かしさばかりが目につく人々に囲まれた環境の中で、パートナーとなるだけの美点を備えてエリザベスと向き合えるジェーンの存在は大きい。性質に違いはあれども対等な者同士が、互いの助けになったり議論を戦わせたりという関係性をもっているのは、実は主人公のエリザベスとダーシーだけではないのだといえる。

エリザベスとジェーンはそのパートナーシップゆえに、両親の「教育的不在」を埋め合わせる役割を担ったりもする。リディアの駆け落ち騒動などでは、父親が実際に不在で、年長の二人が中心となって家族をまとめ仕切っている様子が見られる。また四女のキティーが姉たちの教育を受け入れて生まれ変わることができる様子は、物語の結末の一部として最後に記されている。⁴ キティーは二人の姉によって、それまでの悪い影響が取り除かれ、愚かでなくなるように「改善」される。妹にそれまでの教育の弊害から逃れさせたものは、エリザベス

4 以下、キティーについて描かれた部分を示す。

Kitty, to her very material advantage, spent the chief of her time with her two elder sisters. In society so superior to what she had generally known, her improvement was great. She was not of so ungovernable a temper as Lydia, and, removed from the influence of Lydia's example, she became, by proper attention and management, less irritable, less ignorant, and less insipid. (266)

とジェーンの「教育する力」なのである。

このように、ジェーンとの関係で重要なのは、対立よりも連帯である。全てを男性に関連付けた女性教育から男性との関わりを排除すれば、必然的に独立した女性だけのコミュニティができあがるであろう。しかし二人は、共に幸福な結婚をする。もちろん愛情に基づく結婚というのは、友愛結婚の概念と関係づけられる、より対等な男女の結びつきの形態であり、それ自体が新たな女性教育を実践したものであるということは考えられる。

だが「幸福な結婚」というものが同時に、この連帯のもつ反抗的側面があらわにならないための「装置」でもあることを忘れてはならない。女性が男性に関わってのみ考えられた世界においては、女性のコミュニティは存在そのものが不自然、あるいは危険なものであると見なされ、妨害や介入を受けやすくなる。だがその装置によって、コミュニティは存在を悟られないか少なくとも無害なものだと周囲に思わせ、安全なところに身を置くことができるのである。すなわち、女性の連帯を保つために「父権制の形式を守る」ということが、コミュニティのもつ絶対的な女性教育なのである。ジェーンがエリザベスの婚約を喜んでいる場面は、当然のようにそこに存在する「結婚」についての話を種に、姉妹の絆を確認しあっているようにも見える。

"Now I am quite happy," said she [Jane], "for you will be as happy as myself. I always had a value for him. Were it for nothing but his love of you, I must always have esteemed him; but now, as Bingley's friend and your husband, there can be only Bingley and yourself more dear to me. . . ."

Elizabeth told her the motives of her secrecy. . . . All was acknowledged, and half the night spent in conversation. (258)

つまりこのコミュニティの中にある姉妹関係は、単なる「結婚」という主題の周縁的な要素ではなく、それ自体が重要な主題になりうると考えられるはずである。ゆえに、このコミュニティは結婚という装置によって失われることはない。

オースティンの小説に出てくる姉妹は、『高慢と偏見』だけでなく『分別と多感』においてもまた、結婚後の付き合いを保障されている。⁵ 逆にいえば、それは結婚を完璧に幸福にするためには欠かせない条件であるのだ。さらに、エリザベスの結婚は新たな姉妹関係をもたらしている。彼女は最後にもう一人、新しい妹——ダーシーの妹のジョージアナ——を得ることになるのである。彼女とは、このように理想的な姉妹関係が築かれている。

the attachment of the sisters was exactly what Darcy had hoped to see. They were able to love each other, even as well as they intended. Georgiana had the highest opinion in the world of Elizabeth . . . Her mind received knowledge which had never before fallen in her way. By Elizabeth's instructions she began to comprehend that a woman may take liberties with her husband, which a brother will not always allow in a sister more than ten years younger than himself. (267)

兄に対して情愛よりも強い尊敬と畏怖の念を抱いてきたジョージアナも、エリザベスから対等な夫婦の関係を学んでいくであろうことが、ここには暗示されている。この物語において、結婚プロットが進行する陰で、姉妹の連帯もまた着々と進行しているのが分かるのではないだろうか。

父権的な結婚プロットの枠組みの中で、エリザベスはこのように男性に関連づけられた教育を拒み、女性中心の世界を作り上げたのである。それは父権制への折り合い方を示す一つの道であった。他の女性キャラクターが多くの教養小説のように父権的な女性教育を反映していたのに対して、女性コミュニティ

5. 『分別と多感』より、最終段落を引用する。

Between Barton and Delaford, there was that constant communication which strong family affection would naturally dictate;—and among the merits and the happiness of Elinor and Marianne, let it not be ranked as the least considerable, that though sisters, and living almost within sight of each other, they could live without disagreement between themselves, or producing coolness between their husbands. (*Sense and Sensibility*, 269)

の教育こそが、この小説のもつ独自の「教育観」を表しているのだといえる。父権制から外に飛び出すのではなく、内に別の新たな世界を作り上げることが、より深い女性の世界を築き上げることを可能にしている。その世界は一人のヒロインの内面の問題である以上に、共有する多くの女性たちに、時代さえも超えてつながりゆく問題なのである。

Works Cited

- Austen, Jane. *Pride and Prejudice: an Authoritative Text, Backgrounds, Reviews and Essays in Criticism*. Edited by Donald J. Gray. New York: W. W. Norton, 1966. (Norton Critical Edition)
- _____. *Sense and Sensibility: an Authoritative Text, Contexts, and Criticism*. Edited by Claudia L. Johnson. New York: W. W. Norton, 2002. (Norton Critical Edition)
- Fordyce, James. "Sermons for Young Women." *Sermons for Young Women, 1766 / James Fordyce. A Father's Legacy to His Daughters, 1774 / John Gregory: with an Introduction by Janet Todd*. London: Pickering & Chatto, 1996. (Female Education in the Age of Enlightenment Vol.1)
- Johnson, Claudia L.. *Jane Austen: Women, Politics, and the Novel*. Chicago: University of Chicago Press, 1988.
- Richardson, Samuel. "Pamela: or, Virtue Rewarded." *The Novels of Samuel Richardson: Complete and Unabridged: with a Life of the Author, and Introductions by William Lyon Phelps*. New York: AMS Press, 1970. (Complete in Nineteen Volumes Vol.2)
- Rousseau, Jean Jacques. *Emile*. Translated by Barbara Foxley; Introduction by Andre Boutet De Monvel. London: Dent, and New York: Dutton, 1955. (Everyman's Library)
- Wollstonecraft, Mary. *A Vindication of the Rights of Woman: an Authoritative Text, Backgrounds, the Wollstonecraft Debate, Criticism*. Edited by Card H.

Poston. 1975; New York: W. W. Norton, 1988. 白井堯子訳『女性の権利の擁護』東京：未来社, 1980.

川本静子『ジェイン・オースティンと娘たち——イギリス風俗小説論——』東京：研究社, 1884.

滝内大三『イングランド女子教育史研究』大阪経済大学研究叢書第25冊 京都：法律文化社, 1994.